

研究会報告

2013年4月11日(木) 定例研究会報告

テーマ： A Life Story of a Patriotic Lao Woman: From Paris to a Revolutionary Zone in Laos.

報告者： Ms. Bouakeo Dalalay (元ラオス保健大臣夫人)

時間： 15:30-17:00

場所： 生田校舎 975 教室

参加者数：約 90 名

報告内容概略：

ラオスの内戦・革命・新政権樹立後に渡る激動の現代史に最前線で関わってきた女性の回顧談を伺った。この分野の歴史証言は余り記録されておらず、とりわけ女性による証言にはなかなか光が当てられないことから貴重なお話であった。

ラオスの古都ルアンプラバンで第二次世界大戦中に生まれ育ち、フランス支配下のラオスでリセを卒業後フランスに留学した。パリ大学で産科学を学び、リヨンの助産師学校に進んだ。

第二回ジュネーブ会議(1961-1962)の頃、在仏ラオス人留学生たちは左派のネオ・ラオ・ハクサート(ラオス愛国戦線)と中立派のスヴァナ・プーマ王子の支持者、両派と会う機会があった。帰国して祖国自立を目指す左派運動に身を投じるため、夫よりも一足先にラオス北部山岳地帯の左派勢力解放区へ旅立つことになった。1965年息子を連れて第二子を身籠りながらモスクワに到着、シベリア経由で北京へ移動、北京では産婦人科で働きながら更なる助産スキルを身に付け、第二子もそこで生まれた。やがて夫とも合流でき、ベトナムへ移動した。戦時下のベトナムでは、食事は1日1回に限定され、昼間調理をすることは禁止されていた。こうしてラオス北部のサムヌアに向けて出発する前の1ヶ月間、ベトナムで心理的・イデオロギー的・身体的・物質的な準備を行った。陸路サムヌアに到着すると、絶え間ない爆撃にさらされながら洞窟での仕事と生活が始まった。川での水の汲み方、薪の集め方、煙を出さずに火を焚く方法、集団行動の取り方を学んだ。夫と共に移動医療チームや洞窟内の病院で医療業務に従事した。戦争が最も激化していたこの時期、全ての子供は疎開していたが、第三子は洞窟内で生まれた。米軍が拠り所としていた山頂のレーダーを破壊できたことで戦局は好転し、やがて和平交渉を経て1975年左派の勝利へとつながった。

戦後現政権下では母子保健・青少年育成・科学技術庁の仕事に携わった後、特命全権大使(キューバ・ニカラグラ・中華人民共和国・朝鮮民主主義人民共和国)夫人、保健大臣夫人としての役割を果たした。

研究会参加者からは、左派戦線参加の理由、助産師の道を選んだ理由、留学先選択方法、現在の若者への提言などについて質問が出された。

記：専修大学経済学部・飯沼健子